

# 岐阜大学国際交流室



No. 20

1995年3月10日

## ● 目 次

第4回アジア太平洋大学交流（UMAP）会議に参加して	国際交流室長 堀内孝次	1
[特集1] ソウル産業大学と岐阜大学との学生交流		
1994年度国際大学交流セミナー・レポート～ソウル産業大学学生を迎えて～	学生部長 水崎節文	3
岐阜大学学生セミナー参加記	ソウル産業大学国際交流委員長 文学博士 具 璞林	5
日本へ行ってきて	ソウル産業大学 電子工4年 李 寛哲	6
日本に対する私の印象	ソウル産業大学 金 順香	6
国際交流セミナーに参加して	医学部1年 太田千晴	7
第1回ルンド大学／岐阜大学「言語学及び言語に関する合同セミナー」を終わって	教養部（日本語・日本事情）中須賀徳行	8
国際交流室の活動報告		
①秋の遠足について	工学部（共通講座）坂本秀生	10
②国際理解の集い	農学部（生物資源利用学科）金丸義敬	11
[特集2] 学内の国際交流活動		
留学生との交流会	工学部技術部 物資・システム系技術室 水上精栄・重松宏明	12
国際交流クラブ主催のテーブルディスカッション	教育学部1年 番れい子・魚谷知子	13
「はじめまして」	学生部学生課国際交流係事務補佐員 藤田美穂子	14
小さな“歩み”から大きな“一步”	学生部国際交流事務室長 森山 章	15
お知らせ・1995年度日本語クラス時間割表・編集後記		16

## 第4回アジア太平洋大学交流（UMAP）会議に参加して Toward Greater Reciprocal Exchange based on Asian-Pacific Diversity

国際交流室長 堀 内 孝 次

第4回アジア太平洋大学交流会議が昨年の12月7, 8日に大阪の豊中市千里ライフサイエンスセンターで開催された。参加者数は国内の国公私立大学（114大学）から231人、海外22カ国82人で、アジア太平洋における大学間の国際交流推進について討議された。今回のUMAP会議のテーマは「アジア太平洋諸国の地域多様性に基づく大学間相互交流の発展に向けて」で

あった。会議では次の4つのシンポジウムが準備された。

- 1) 留学生の企業研修と産学協力
- 2) 交換留学生の現状と問題点
- 3) 大学としての国際交流の取り組み
- 4) 学生交流における言葉の障害

シンポジウムの開始にあたって、筑波大学学長の江崎

玲於奈組織委員長から次のような熱のこもった素晴らしい挨拶があった。その一部を紹介すると次のようにある。

『言うまでもなく、科学と研究は国際交流無くして成就することはできません。しかしながら私達はそういった交流の際、色々な障害があることを理解する必要があります。例えば、言葉の違い、財政的貧困、心理的や文化的諸問題などあります。私達はこれらの障害を互いに認識しあい、またそうすることによって、このような難題を克服する道を見つけることが可能なのです。』

挨拶に次いで基調講演がなされた。主な話のポイントは以下のようであった。UMAPの設立目的は既に先発しているERASMUS (European Action Scheme for Mobility of University Student) に依拠している。ERASMUSプログラムは1987年以来、EU（欧洲連合）委員会の支援を受けて、EU加盟国大学間の交流を成功裡に急速に拡大、発展してきている。これに対してアジア太平洋諸国は広範な地域に散在し、経済・社会・文化的にも異質な国からなる。地域間の協力はようやく始まったばかりであるが、他方、世界でも最も急速な経済発展を達成している。発展を維持し、域内協力を活性化するには、大学交流を通じて高い能力を持った人材を育成し、相互理解を増さねばならない。UMAPの文字はUniversity mobility in Asia and Pacificの頭文字をとったものである。

日本の大学の場合、UMAP推進の前に現在の国際交流の現状と問題点を整理する必要がある。特に私立大学に較べ学生交流が後発となっている国立大学では現状認識が国際化への出発点である。東京大学からは次のような実情が報告された。これまで留学生の受け入れに対しては、充分な基本方針がなかった。このため留学生を日本人学生と同じ様な考え方で受け入れられるのかということについては、以下の二つの考えに分かれた。即ち1) 日本語が出来るものとして受け入れる。2) 異文化をもつ者を受け入れるための別の枠組みとして受け入れる。この中、現在では異文化を持ち込むことによって大学の研究・教育を充実させる効果を期待する方向に進んでいる。この場合、国費留学生の割合を高め、財政的支援体制を充実させる必要がある。実際、学部の入学試験を受けて入ってくる学生(undergraduate student)は少なく、特別聴講生が多い。なお、大学院入試の実情についても留学生に対する公平さを考え、ある程度、統一する必要があると思われるとしている（東京大学総長講演より）。

当面の課題として、◎短期留学生（6ヶ月または1年間）をどのように受け入れられるか。◎プロジェクトによる学生・教官の交流を進めるに当たっては、どのような予算的措置を考慮すべきかなどがある。いずれにしても、留学生はどんどん受け入れるべきで、必要不可欠な人材として増やす。それには受け入れ制度にflexibilityをもたせ、大学ごとの個性を維持しながらそれぞれのphilosophyを創る必要があるなどの提言があった。

シンポジウムは交換留学生の現状と問題点及び大学としての国際交流の取り組み（特に短期の留学について）に注目がおかれた。この点UMAPを推進するまでの問題点として次の諸点が指摘された。

- 1) 財政的支援
- 2) 言葉の障壁
- 3) 単位の互換
- 4) 大学内のサポート
- 5) 大学外の諸問題（ビザ関係など）

筑波大学の場合、◎単位互換を一定範囲内で認めている。◎学生がオーストラリアに留学するメリットとして学期が3月始めから翌2月までであることが日本のシステムに好都合である。これにはJYA (Junior Year Abroad) システムを導入する方向を考えている。◎留学生の受け入れに関するadmission standardについては次のようにある。交流を高めるためには、日常生活ができる能力は欲しいが、余り厳しい日本語能力を要求することは基本的にはしない方がよい。このためには多様なプログラムで受け入れ体制をつくる必要がある。具体的には1) 入門コース(Introductory course) を受け入れ単位とする。2) Regular programでやる（英語でやる）。3) 初級、中級、上級（日本語クラス）を編成する。

これらを実現するための提案は次のようにあった。まず、○シラバスを英語に直すことが必要。○先方大学での単位認定をし易くする。○こちらでは単位は出せないがcertificateは出す。これによって先方大学で単位と認定することは可としている。

その他企業から大学へいくつかの提言がなされた。  
○Faculty mobility for exchange student and researchの推進

○教官の移動については国公立大学でも共同研究を推進する上からも、サバティカルを実施するべきである。  
○地域と協同して受け入れる。例えばホームステイ等

日本の文部省は日本語教育に対する考え方を各大学の自主性に任せている。例えば英語教育システムを設置する、あるいは効果的な日本語教育の受け入れシステムを考える、これらは各大学に委ねられている。

今回のUMAP会議に参加して感じたことは、日本の大学全般に見られる交流概念の認識度の低さである。未だ日本語の出来ない留学生は受け入れるべきでないとする人と、英語でも受け入れるべきだとする人が反目し合っている状況である。この点は私立大学よりも国立大学で顕著である。しかし、対外的に国際化が進んでいるか、もしくはその必要性を厳しく受け止めている大学では、世界共通語としての英語での受け入れに積極的である。例えば早稲田大学の英語による授業コースがそうである。日本が外国から見て極めて閉鎖的であるとされるのはlanguage barrierが最大の理由と言われるのである。日本が本質的に国際化に向かうためには子供達に対する外国語教育がシステム的に改善される必要があり、目下その途上にある。日本で外国人を受け入れる場合は日本語教育システムの確立も重要であるが、他方、今後盛んとなる派遣については、やはり英語能力の向上を目指した指導努力が必要であろう。そしてこの努力を惜しまない人達によって、国際感覚が養われるべき次世代の学生達に対して適切な指導がなされていくのだろう。従って、今後の国際化教育は特殊教育と考えるのではなく、一般専門科目でも外国人留学生や海外に派遣する学生に対する対応も含めた英語による授業の設置も考える必要がある。従って、教職員自体ができるだけ積極的に国際対応をしていくことが、大学全体として、また国際的にも現実に見合った歩むべき道であると思われる。少なくとも学生たちにはそのような教育をする必要があるだろう。

国際化の流れは、今後さらに加速されることは確かであるし、こちらで動かすとも国や社会全体が動いているので、自然とそのように変容していくことになると思われる。韓国では有能な人材を育成するために積極的に学生達を外国へ留学させるよう指導しているようである。何よりも学生自体が勉学の意欲に燃えて留

学を強く望んでいるという報告があった。オーストラリアでは将来、UMAP計画が実効することにより、かなりの労働機会が増えることを予測している。アメリカでも日本経済についての関心が高く、企業現場の考え方等を勉学したいと考えている学生も多いようである。このような社会背景の下で学生の国際化教育を推進するためには、大学自体が可能な限り様々な対応形態で実戦することが求められると思われる。例えば日本語での教育を受け入れの必須条件と考える教官や英語の苦手な教官は日本語のできる留学生を積極的に受け入れて指導する。また、英語でも受け入れ可能な教官は日本語が出来ない留学生も指導するというように、全学が国際感覚をもつ大学になれば、岐阜大学全体が教育・研究面でさらなる向上が期待できると考えるのである。

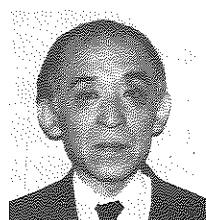
話は変わるが、この1月19、20日にアメリカのサンフランシスコで第1回の日本留学フェアが開催され、これに国立11大学、私立12大学が参加した。岐阜大学も積極的に参加し、本学ブースには東京大学、大阪大学、筑波大学に並んで多くの学生や教官達がやってきて留学の興味を示してくれたのはうれしいかぎりであった。参加者200人の中にはスタンフォード大学やカリフォルニア大学からの学生たちも本学への留学を希望し、そのための情報の提供を要求していた。また、かねてより本学と協定を結びたいという意志を示していた州立ユタ大学も国際担当教官が岐阜大学ブースに再三顔を見せ、今後の協定を強く希望していたのが印象的であった。

岐阜大学が国際交流を積極的に推進していることは文部省でもよく知られており、また、地元の地域住民からも国際交流に関して留学生の多い本学に大きな期待が寄せられている。今後さらに大学の使命として時代の変容と社会要求に見合った国際化教育を実施していく上で、大学個々のより積極的な国際化対応が望まれるところである。

## 特集1 ソウル産業大学と岐阜大学との学生交流

### 1994年度国際大学交流セミナーレポート —ソウル産業大学学生を迎えて—

学生部長 水崎節文



1992年にソウル産業大学との学術交流協定が締結され、その年から両大学教官が相手大学を訪問する短期交換講義が始まった。初年度は、ソウルからは国文学の辛基相教授が来訪され、本学からは私

が訪韓する光栄に浴した。93年度は、本学・三浦陽一助教授の「日本文化論」の講義と、ソウル産大・李漢鐘教授の「現代韓国の政治と経済」の講義が交換されている。

ソウル産大からの留学生の受け入れも、すでに工学部で先行的に行われていたが、この協定に基づいて毎

年2～3人の留学生を1年間の期限で受け入れるようになり、両大学の学術交流はようやく軌道に乗ってきたといつてもよい。難をいえば、本学からソウル産大へ留学する学生が未だに現れていないことであり、言語問題をはじめまだ幾つか乗り越えなければならない課題が残っている。

国際教育協会に補助金による「国際大学交流セミナー」開催が公募されたのを契機として、本学では直ちにこれに応募し、両大学学生の合同セミナーが企画されたのであるが、残念なことには本年度の選考からは漏れてしまった。予算が伴わなければどんな優れた企画でも実施は極めて困難である。この窮状を開いたのはソウル産大側の非常な熱意であったといってよい。すでに日本に派遣する学生の選考も終わり、セミナー参加の訓練も進行しているので、学生の旅費・滞在等の費用は自前でよいから是非実現したいとの要望であった。

そこで、本学国際交流委員会と学生部学生課・国際交流室との連携プレーのもとに実施協議が開始された。この夏にはスウェーデン・ルンド大学のサマー・スクールがすでに企画されており、限られたスタッフと予算では尋常なことでは実現できるものではない。しかし、相手方の熱意には誠意で応ずるのが国際交流の第一歩ではないのか。我々スタッフ一同にもこのような共通認識があったように思う。合意された日程は8月8日より1週間で、日本一暑い岐阜でも文字通り猛暑のさなかであった。

来学した一行は具臻林教授（言語学）引率の10名の学生、女子は2名。全員日本は初めてである。2年から4年まで専攻も機械工学、デザイン、英文学、歴史学とさまざまである。日本語の訓練も行ったというが日常会話には程遠い。だが、英語ではかなりの会話能力がある学生も見受けられた。すでに本学に留学しているソウル産大生が滞在中ずっとつき添ってくれた。

大きな課題は宿舎と食事等の日常生活である。本学の学外合宿研修施設を当てたが、猛暑の中でクーラーもない。貸しふとんと扇風機を調達して凌いで貰うはない。事前に米・キムチを購入して運び込んだが、あとは近くのスーパーで自前で買物しての自炊生活である。ソウル産大留学生の世話を期待する。

迎える本学のセミナー参加者は、1年次教養科目「三浦セミナー」学生と希望者数名。年齢的には全体としてソウル産大生より若いが「三浦セミナー」では日韓の歴史と韓国語の初步を題材としているので、このような人選となった。これまで韓国についてほとんど未知であった入学したての日本人学生だけに、一部

には兵役まで経験した韓国学生と対等に議論できるかと、気になるところである。

セミナーの内容は、専攻の多様性と初めての学生交流を考慮して「日韓の生活・文化・習慣・言語について」とポピュラーなものを選んだ。お互いに学びたての相手国言語と英語を交えてディスカッションするのが理想であるが、現実には不可能に近い。それはパーティーや小旅行、市内散策で試みることとし、セミナーでは留学生の通訳を介在させ、一部英語を用いることにした。

セミナー日程は次の通り。

8月8日 宿舎で旅装を解き、食事等のガイダンス。  
夕方よりウエルカム・パーティー。

- |     |                           |             |
|-----|---------------------------|-------------|
| 9日  | 午前 基調講演（岐大水崎教授）『日韓の生活・文化』 | 午後 討論       |
| 10日 | 午前 基調講演（ソ産大具教授）『韓国の言語構造』  | 午後 討論       |
| 11日 | エクスカーション（奈良）              |             |
| 12日 | 工場見学（ロボット工場・ビール工場）        | 夕方 歓送パーティー。 |
| 13日 | フリータイム。日本人学生と市内見学等        |             |
| 14日 | 大阪・京都方面へ出発。               |             |

セミナーは、私の基調講演の内容「日本と韓国はどこが似ているのか、どこが違っているのか？」を題材にして、それに両大学学生のテーマ別のレポートを問題提起として行われた。私が提供した題材は、○1親子関係・男女関係等の家族制度 ○2礼儀作法や感情の表現 ○3比較言語構造 ○4日韓関係の歴史、についてである。

偶然なことではあるが、私は戦前の韓国に生まれ、13才までソウルで育っており、最近になってしばしばソウルを訪れ、韓国語も多少勉強しているので、専門の政治学にこだわらずにポピュラーな話題を提供できたと思う。

家族制度や家族関係については、両国とも儒教の伝統をもちながら、日本では近代化の中で急速にその影響が薄れているのに対して、韓国では最近ややその傾向があるものの、法制度や生活慣習においてかなり根強くそれが存在していることが浮き彫りにされた。

日本の女子学生から「家庭や職場における男女平等」についての問題が提起されたのに対して、韓国の女子学生からは「平等論」は認めつつも、男女の相違による役割分担の必要性が強調された。また親子関係にみ

られる長幼の序などの現実的な認識の相違も、両国の青年の間にかなりギャップがあることが明らかになった。

生活習慣や価値観については、日本人学生から「わび・さび」についての感覚や日韓における美的意識の相違が問題として出されたが、これはどうも相互の共通の議論には至らず、そのことが両国の壁を感じさせたようである。

言語構造については、具教授の専門的な問題提起を受けて、日本人学生からも韓国語の表現方法やハングルの表記方法についての感想や疑問が出された。本学に留学中の韓国人学生も加わり、かなり白熱した議論となった。例えば、「八方美人（パルマンミイン）」と

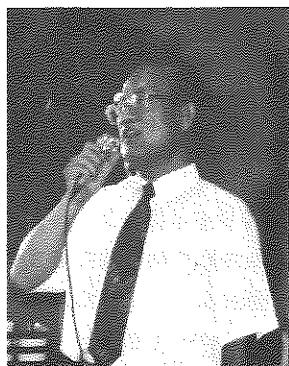
「いわれた時にどう思うか」との問いに、韓国人女子学生は「嬉しい」と答え、日本人女子学生は「嫌な気がする」と答えたことなど、漢字を使用し酷似した文法構造を持つ両国の「似て非なる」側面を現しており、それが糸口となって議論が深められた。

過去の日韓関係を最近学んで驚いた日本人学生の率直な感想が語られたが、これに対する韓国人学生の反応は厳しいものがあった。日本では何故過去の歴史を正しく教えないのか、日韓基本条約が過去のすべてを解決したと思っているのか等々。これには日本人学生はまず答えることができなかった。友好関係が築かれつつある両国のあいだでの最も厳しい壁が感じられたが、これは決して避けてはならない課題だったと思う。

## 岐阜大学学生セミナー参加記

ソウル産業大学 国際交流委員長

文学博士 具 琮 林



学長をはじめ先生及び  
関係者のみなさま先日ソ  
ウル産業大学の学生たち  
の岐阜大学訪問を盛大に  
歓迎して頂きました上、  
セミナーを成功させるた  
めご協力いただき、深く  
感謝致します。特に、小  
澤国際交流委員長と委員  
のみなさんや学生部長、

学生課のみなさん、浮田事務局長と職員のみなさん  
に一方ならぬお世話になりました。またセミナーに参加  
してはじめて討論を行った岐阜大学の学生のみなさん  
にも本当に心から感謝致します。

たった6日間の短い期間でしたが、今回の岐  
阜大学の訪問を通じて日本に直接触れることによって、  
日本に関するすばらしい体験をさせていただきました。  
多様で充実したプログラムは岐阜大学の訪問をより有  
益にし、われわれを感動させました。両校の先生の特別  
講演はお互いに理解と友情を深めました。両国の文化、歴史、伝統、言語、習慣に関するセミナーは穏や  
かな雰囲気の中ながら真剣でした。朝日新聞と岐阜新  
聞の取材でわれわれはびっくりしました。マザックを  
はじめ産業体の見学では先進科学技術の忘がたい印  
象が胸に深く刻みこまれました。奈良の見学でも日本

の景色とともにいろいろなことを学ぶことになりました。澄んでさわやかな川、青い山、のんびりとした農村の風景、高速道路の数ある種類の自動車など日本のいろいろなことを観察することができました。

現代科学技術では世界の尖端を走り、経済的にも最高に豊かな国にもかかわらず一人一人の生活は儉約した質素であるのをみてびっくりしました。学校のキャンパスはもちろん、どこに行っても見えない裏まで町全体がきれいなのはうらやましかった。岐阜大学の学生は率直で純粋であり、自分の感情と意見を比較的ありのまま表現するようでした。討論会で彼らははじめて韓国を正しく知ろうと努力しました。特に歪曲された過去の韓日関係（韓日史）に強い関心をもって眞実を把握するため全力を尽しました。また彼らは韓国の学生に対して親切で友好的に歓迎してくれました。ある学生は韓国のキムチをつけてもってきたりしました。「おぼん」という祭にもかかわらず忙しい所時間を割いて岐阜城や市内を案内してもらったりしました。

現代の社会の流れは国際化、開放化時代です。われわれは過去の広い世界ではなく一つの狭い住んでいてそのような時代に存在しています。日本と韓国はとなりの国であり人種や文化的な伝統でも共通点と類似点をもっている民族であります。したがって両国民の相互理解と友好は、両国はもちろん世界平和と人類の福祉に大きく貢献すると私は堅く信じております。

## 日本へ行ってきて

ソウル産業大学電子工学科 4年

李 寛 哲

8月8日から17日まで教官の指導下に協定校の岐阜大学と大阪、東京などを見学することになりました。いつも頭の中で抽象的に考えた日本という国について、大よそでしたが直接見聞してきました。8月8日午後3時30分名古屋空港について、はじめてむかえたのは37度の天気でした。予想した通り、日本は本当に暑かったです。

岐阜大学では「国際大学交流セミナー」が開かれて、9、10日の両日間、岐阜大学と韓国のソウル産業大学生合わせて約20人が今後の友好関係や家族感の違いなどについて討論しました。主題は文化、韓国史、家族などでした。

韓日史が討論の主題の時に、岐阜大学生の中村さんから韓国に対する知識が少ない理由は、正直に過去の歴史を見ていないことが原因であるという意見も出ました。日本といえば私たちは「近くで遠い国」といい、学生達にアンケート調査をすると、世界で一番きらりな國の第1位は日本だという統計が出ています。貿易収支の面でも、取り引き量が他の国と比べて最高に多くて、また赤字貿易、いいかえれば輸出より輸入が一番多い国が日本です。このように韓国海をわたってすぐ目の前に見えるような日本と、昔も今も私たちの国と不可分離の関係にもかかわらず、対日感情はおたがいによくない。それは歴史的でだれでもよくわかる外侵と統治の屈辱的な経験をいまも記憶しているからです。このような理由などで私たちの感情は、日本に対して無条件に好意的にはなれません。しかし、日本は



送別会にて、ソウル産業大学の皆さんと世界一等国に含まれていて、国勢面でひけをとる私たちは、無条件に感情だけを表にたてずに落ちついて日本の文化と経済をならわなければならないのでしょうか。

近づいてくる21世紀の太平洋時代にそなえるために韓国－日本間の協力がどの時よりも強調されていて、韓日両国の相互の理解が必要な時です。すなわち、両国間の相互の理解のためには若い世代の交流がなによりも重要だと思い、今回の機会は岐阜大学－ソウル産業大学間の親睦を深める機会になったと思います。

今回セミナーを通じて両国的学生はこのような点を発見し確認し、それをもっとふかめる動機になりました。岐阜大学でのセミナーが成功したことにももちろん私たちは感銘を受けました。したがって私をはじめソウル産業大学の学生達はこのような機会が断続しないでつづいて毎年実施されることを願っています。次はわれわれが日本の学生たちをむかえるためにこれから心の準備と細心の計画をたてなければと思います。

## 日本に対する私の印象

ソウル産業大学

金 順 香

日本、特に岐阜大学を訪れ学生の皆さんと友達になる機会が持てた事を大変嬉しく思いました。皆様の親切に心より感謝致します。正直なところ皆さんの韓国やハングルに対する関心の深さにはかなり驚くと共に、日本とその文化についてほんの僅かしか知らなかった私にとって今回の日本訪問は本当に良い経験となりま

した。二国間の歴史とライフスタイルについての話し合いは実に有益な経験であり忘れ難い事でした。セミナーの雰囲気は調和のとれた自由なものでしたが、時々二国間の歪められた歴史の見解についての意見が一致しない時は心地が良くありませんでした。しかしながら、ディスカッションを通して韓国と日本間の正しい



交流に参加した教養部三浦セミナーの学生たち関係を知ることが出来、又日本について理解することが出来ました。何よりも皆さんと私は現代の韓国と日本の学生達が過去の不幸な歴史を直し建設的な関係へと導かなければなりません。私は日本に対する偏見を取り除く努力をし、又日本を正しく理解しようと決意しました。僅かな滞在にも関わらず岐阜で出会った人々は大変印象深く感じました。例えば可愛らしい女性後藤さんと森清君は少し韓国語を話し、韓国やハングルに興味をもっていました。私達にキムチを作ってくれた京谷君、そして黒田さんの事は本当に好きになりました。

なぜなら彼女は私たちを母のようにずっと面倒をみてくれたからです。私は彼女の事を生涯忘れないでしょう。国際交流委員長である小澤先生は寮の事をとてもよくとりはからって下さり感謝しきれません。水崎先生は50年前にソウルに住んだことがあってソウルを故郷のように思っている先生でした。又、瀬戸崎先生の通訳にはとても感謝します。とても長くて綺麗な長良川と釣り竿のかわりに鳥をつかってのユニークな魚とりの方法も深く印象に残っています。岐阜大学のプログラムと皆さんの親切は忘れないでしょう。寮で韓国語と日本語と英語とジェスチャーをつかって日本人とゲームをしたり、夜通し話して互いを理解しあおうとしました。その結果、過去の歴史をはっきりさせる事が必要であり又、たとえ国や言葉が違っても永遠の友情を形成できることを心より望みます。友よ！ 私はあなたの方と出会えた思い出を大事にしてゆこうと思っています。

(国際交流室事務補佐員 大崎松美による英文からの翻訳)

## 国際交流セミナーに参加して

医学部1年

太田千晴

最初は、教養セミナー学生の強制参加という感じだったので、わざわざ夏休みに学校まで行かなければいけないなんておっくうだなあと思っていましたが、いざ参加してみるとディスカッションなどもとても活発で楽しく有意義なものでした。今では参加できてよかったですと思っています。ソウル産業大学の人達はみんな親しみやすく気軽に話しかけてきて仲良くなることができました。ただ、短い時間しか一緒にいられなかったのが残念でした。

私は8月9日と10日に行われたディスカッションと、10日の工場見学、12日の送別会、13日のフリー行動に参加しました。ディスカッションでは言語構造や文化、風俗、社会について発表したり、討論したりしました。セミナーで少しばかりハングルと韓国について学んだのですが、"隣の国韓国"と言われるわりには知らないことが多いというのを感じました。討論の方はすごく活発に意見を言っていました。家族像とか職場等における男女間の問題についても自分なりの考えをしっかり持っており、どんどん自分の意見を述べるので、私は

その迫力に押されっぱなしで何も言うことができず少し残念でした。自分はそれほどまでの考えを持っていないなと恥ずかしい思いでした。この討論の中で、日本と韓国は近いためか、言語や考え方についても似ている点が多くなったように感じました。興味深かったところは、男女平等についての考え方の差でした。日本では男女同権で、仕事でも女性だからお茶くみをしてほしいなど、性によって仕事を決めて欲しくない、同じように扱ってほしいと考えますが、韓国の人達は、



ソウル産業大学学生との交歓（筆者は手前右）

男または女にしかできないとか男または女がした方がふさわしい仕事があり、役割分担だと思えばいいと考えているみたいです。こうやって討論することによって、互いの社会などについて少しでも知ることができ、とてもよかったです。

ディスカッションでは席も離れているし、通訳も入るということであまり親近感を感じませんでしたが、ディスカッション後のショッピングや工場見学のバスでの移動中に、会話を直接交わすことで仲良くなることができました。セミナーでハングルを習ったといつても、文字と少しのあいさつ言葉だけなので、会話が出来るはずもなく、もっぱら英語でコミュニケーションしていました。自分が全然英語ができないのでなかなか思っていることが話せず、じれったい思いをしました。でも何とか単語を並べて、会話を交わすことができました。韓国の人達はみんな英語が上手で、中には独学で日本語を勉強し、かなり話せる人もいて、熱心に勉強しているのだなあと感じました。話は趣味とか、互いの専攻科目についてとか、学生はよく勉強するの？といった感じのことで、私の下手な英語を、一生懸命理解しようしてくれてとてもうれしかったことを覚えています。工場見学後の夕食会や送別会後に、学生の寄宿舎となっている学外研に遊びに行ったとき

は、ゲームをして楽しみました。日本のとよく似ていって本当に楽しんでやることができました。完全に言葉が伝わらなくても、身ぶり手ぶりとハートでコミュニケーションができると強く感じました。

最後に私が韓国の学生との話の中で、一番心に残っている言葉を書いてこの文を終わりたいと思います。  
(女の人の言葉です)

「私は日本にくる前は、あまり日本人に対してよいイメージを持っていませんでした。でも日本にきて、日本の学生がみんな親切だからそのイメージがかわりました。侵略したという過去の事実を知るのも重要だけれど、もっと重要なのは今の関係です。今回のセミナーのこと、私達のことを日本の友達に話して下さい。私も日本のことについて友達に話します。一番大切なのは現在の関係なのです。」

この言葉に納得すると同時に、すごく感心しました。自分ならきっとこんなことは言えないと思います。やはりもっと勉強が必要ですね。本当に“近い国 韓国”についてもっと知らなくてはと思いました。

短い間だけどとてもいい経験になりました。参加てきてとてもよかったです。ありがとうございました。ありがとうございました。

## 第一回ルンド大学／岐阜大学「言語学及び言語に関する合同セミナー」

岐阜大学国際交流委員会合同セミナー担当委員

教養部（日本語・日本事情） 中須賀 徳行

岐阜大学は、スウェーデンのルンド大学と1987年（昭和62年）に学術交流協定を結んで以来長年にわたって国際交流を続けてきたが、その一つの成果として、1994年（平成6年）9月20日、21日の両日、岐阜大学の柳戸キャンパス学生会館で、第一回の「言語学及び言語に関する合同セミナー」を開催した。ルンド大学言語学科から6名、岐阜大学側から5名が発表し、運営は岐阜大学国際交流委員会が受け持った。

プログラムからも分かるように、セミナーでの話題は多岐にわたり、ルンド大学からは東南アジア言語の音調、ジェスチャー、言語獲得に関する諸問題、台湾高山語、言語における普遍性、コンピュータを用いた日本語教育など、岐阜大学側からは英語におけるアクセント、隠喩、談話分析、文学における想像と判断、

日本語の受動態などに関する発表があった。



アルツール・ホルマー氏による発表

言語研究者はもちろん、ルンドからの留学生や日本人学生や市民も参加し、その数は當時20名前後であった。会場での討論はもちろん、その後も個人的に議論が交わされ、研究誌を交換したいとの申し出も受けた。実際これは実現し、お互いの紀要を既に近年分5冊ずつほど交換し、今後も継続する事となっている。先方から戴いた”Working Papers, General Linguistics / Phonetics, Department of Linguistics, Lund University”は付属図書館で保存していただくことになっているので、ご関心のある方はご覧いただきたい。最初の試みでもあったので、規模的にはささやかなものであったが、これを契機として両大学間、および両国間の学術交流が今後大いに発展していく事を切に祈りたい。なお、このセミナーの報告書を作成したので、更に詳しくお知りになりたい場合には、国際交流室なり私の所までご照会いただきたい。

〈合同セミナープログラム〉

The First Joint Seminar on  
Linguistics and Languages

Lund University, Sweden & Gifu University, Japan  
sponsored by the International Exchange Committee,  
Gifu University

DATE : Sept. 20 and 21

PLACE : Meeting Room No. 6, University Hall,  
Yanagido Campus, Gifu University

SEPT. 20  
14:00-17:00

1. Jan-Olof SVANTESSON (LU): The Origin of Tones in Southeast Asian Languages.
2. KUMAGAI Yoshiharu (GU): Accent and Relevance.
3. Marianne GULLBERG (LU): Coverbal Gestures in Second Language Discourse.

SEPT. 21  
09:00-12:00

4. Gisela HAKANSSON(LU): Issues in Language Acquisition Research.
5. SETOZAKI Yasuko (GU): The Power of Imagination and Judgment from Northanger Abbey and The Portrait of a Lady.
6. Arthur HOLMER (LU): Seediq Preverbs and Adverbs.

13:00-17:00

7. IWATA Seiji (GU): Metaphorical Mapping and Domain Structure.
8. Ann LINOURALL (LU): Transitive Verbs and Their Objects as Prototypes.
9. KATO Yukiko (GU): Nuance of Passive Sentences in Japanese.
10. Birgitta LASTOW (LU): A Japanese Parser in Japanese Language Teaching.
11. M. Lynne BOECKLEIN (GU): A Discourse Look at Cleft Sentences.

〈ヤン=オロフ・スヴァンテソン博士の合同セミナー報告書への挨拶文〉

The cooperation program between Gifu and Lund Universities has been going on for quite a long time, but for most of us this was our first visit to Gifu. We were all delighted by the excellent reception and great hospitality shown to us by Gifu University, and the opportunity to meet and discuss with Japanese colleagues was most valuable for us.

During the Joint Seminar we listened to the research reports from Japanese colleagues, ranging from an analysis of *The Portrait of a Lady* to *metaphorical mapping*, to mention just two of them, and our own talks, as well as the Japanese ones were fruitfully discussed during the seminar.

We have already had some cooperation between the Lund Department of Linguistics and Gifu University: our graduate student Mikael Vinka has been at Gifu for several years and our Research Engineer Birgitta Lastow has also studied Japanese at your university. This Joint Seminar is a first step towards a continued cooperation, and we hope this cooperation will increase in the future.

Jan-Olof Svantesson

## 国際交流室の活動報告

## 秋の遠足について

国際交流室員・工学部（共通講座）

坂本秀生

本学の留学生と日本人学生・教職員とが知り合い互いに親睦を深めるため国際交流室が企画・実施するレクリエーションとして、今年度は10月15日（土曜日）にリトルワールド（愛知県犬山市）への遠足を行いました。

午前8時半出発の予定をやや遅れて本学を出たバスは午前10時頃リトルワールドに着きました。別に直接車で来られた堀内室長が先着していて、入口の前で我々を迎えてくれました。用意していた飲物が配られ、参加者全員が入場した後は、午後2時半の集合時間までそれぞれ自由に見て回ることになりました。

ここは広い敷地の中の1周約2.5kmの道路に沿って世界各国から集めた民家を展示する野外民族博物館です。トリンギット族（アラスカ）の家、ニヤキュウサ族（タンザニア）の家、カッセーナ族（南アフリカ）の家、ドバ・バタック族（インドネシア）の家、ヤップ島（ミクロネシア）の家、ヤオ族（タイ山地民）の家、ランナータイ族（タイ平地民）の家、ネパールの仏教寺院、韓国の農家、台湾の農家などがありました。また日本のものとしては月山山麓（山形県）の家、沖永良部島（鹿児島県）の高倉、石垣島（沖縄県）の家、アイヌ（北海道）の家などがありました。他に多種多様な仮面、衣装、楽器、神仏像など約六千点の民族資料を集めたという展示室があり、諸民族の伝統文化や風俗・習慣をビデオ映像と音声によっても説明していました。またこの日は野外ホールにて、国立モンゴル



昼寝も気持ちがよいもの

サークスの日本初公演中でしたので、民族色豊かで大胆・華麗な数々の演技を見ることも出来ました。

当日はさわやかな秋晴れの良い天気に恵まれました。帰る途中では、犬山城の付近にて約1時間過ごし、それぞれに散策を楽しみました。大学到着は午後5時半頃でした。今回の参加者（14カ国、合計50人）の内訳は次の通りです。

留学生本人：24人 留学生の家族：8人（内子供4人）

日本人学生：8人 教職員：10人

帰りのバスの中で実施したアンケート（回収率84%）には、参加した学生から次のような感想が寄せられました。

## 留学生から

- ・言葉で表現できないほど楽しかった。
- ・特に教育学部の佐原先生と一緒に如庵茶室へ行ったのが一番楽しかった。
- なぜなら日本のお茶文化がより分かるようになったから。
- ・リトルワールドの見学は時間が短かったがとても楽しかった。とても印象深かった。

## 日本人学生から

- ・色々な留学生の方と交流できて良かったと思います。
- ・知っている留学生が来ていなかったのが残念でした。もっと沢山の留学生が参加していたらと思いました。
- ・英語を勉強したいと思います。

これらを見る限り参加者は今回のレクリエーションを大いに楽しんだ様です。企画した側の者としての反省点は、博物館の見学時間をもう少し長く取るべきだった、参加者相互がもっと密接にコミュニケーションを取れるよう工夫すべきだった、などです。

今回参加できなかった方も、次回には是非参加してみて下さい。いろいろな人と知り合いになれますよ。



青空の下、記念撮影

## 国際理解の集い

国際交流室員・農学部（生物資源利用学科）

金丸義敬

岐阜大学国際交流室では、「国際理解の集い」として、留学生たちに様々な話題を提供してもらい、それについて参加した学生・教職員が質問や意見を述べあう場を設けてきている。平成6年度の第2回目の国際理解の集いは11月3日（木曜日）に開かれた。この活動が企画された当初の目的である留学生と日本人学生・教職員たちの相互理解を深める場の提供だけではなく、留学生と一般市民の方々との交流も考えてみようとのことで、今回ははじめての試みとして、大学祭期間中の休日の午後に開催してみた。

当日は、期待したほどの人数ではなかったにしても、それらしい一般の人たちも確かに加わっておられて、時には留学生に質問をしたり、国際交流についてのご自分の考えを述べるなどして、この集まりを結構楽しんでくれていたように思われる。記帳してくださった方たちだけでも43名を数え、一時的に加わってくれた人たちも加えると、おそらく50名を超える人たちが参



加したのではないかと思われる。そのうち約20名がスピーカーを引き受けてくれた留学生をはじめ、外国人留学生であった。

軽食と飲み物を用意し、はじめの30分程は初対面のぎこちなさから早めに開放されるように、前回同様、勝手に食べたり話したりする時間とした。その後、ポスターに示されているように、留学生たちによって提供された話題を中心におしゃべりをした。留学生達の話題は、いつものように私たち日本人の思いもよらないことが多く、聞いているだけでもとても楽しいが、今回はいずれの話題に対してもたくさんの質問や意見が出され、明るく活発なおしゃべりの場が出来上がっていたように思われる。

残念ながら今回もまた準備不足の面もあった……スピーチのための資料作成にもっと費用と時間をとることができたらよかった……食べ物ももっと雰囲気のあるものにしたかった……もっと早くからポスター等を用意して、多数の参加者を集めたかった……用意された話題について前もって十分に検討し、もっとつっこんだおしゃべりをしたかった……等々。

責任者として何よりうれしかったのは、最近にななく多くの人たちを集めることができたことであった。そして国際交流を図るといった趣旨は別にして、参加者が結構楽しい時間を過ごしてくれていた様に思われることも、ほっとしている理由である。残念ながら、相変わらず時間不足で、十分にコミュニケーションできなかつたという不満もいだいているが、今後さらに充実した集まりが企画されることを望んでいる。

一岐阜大学国際交流室

## 国際理解の集い

日時  
11月3日（木曜日）  
午後1時～

場所  
教養部二階  
28番教室

どんなこと？

楽しいおしゃべり

— 話題提供者 —

CHO DAE HEDN(韓国)  
NGAMBI, SAMSON CHABALANGA(ザンビア)ザンビアについて  
CAICEDO, RICARDO ENRIQUE(パナマ) パナマ大西洋の貝殻  
YANG SHAN MING(台湾) 日本での生活について  
ZHAI ZHI HAO(中国) 國際理解について  
山崎恵子(日本) 國際交流と國際交流クラブ  
魚谷知子(日本) 未定

(軽食を用意します)

学生、留学生、教職員  
一般の方、大歓迎(参加無料)

お問い合わせ： 岐阜大学国際交流室 (内線2380)

特集2 学内の国際交流活動

先号のNewsletterで、大学内で留学生との交流活動を行っているグループがありましたらお知らせ下さい、と呼びかけたところ、工学部技術部有志の方々と国際交流クラブから投稿がありました。ここに紹介いたします。

## 留学生との交流会

工学部技術部 物資・システム系技術室  
水上精栄・重松宏明

工学部技術部では技術職員の有志による第1回留学生との交流会を1994年3月11日に、第2回交流会を1994年10月6日に行いました。また留学生との花見の会を1994年4月6日に墨俣城公園において行いました。私たち技術職員は日頃、研究室や実験実習において特定の留学生と接触する機会はありますが、様々な國の人達とお互いの國のことについて真面目に話し合い、異文化を理解し合える機会はなかなかないように思います。そこで技術部で積極的に話し合える機会をつくっていくことでお互いに国際性を身につけていこうと計画しました。進行方法は始めに2人の留学生の方に20～30分間適当なテーマで報告していただき、その後軽食と飲み物をとりながら質疑応答を行うことにしました。実際は国際政治から文化・宗教・習慣までさまざまなことをフランクに楽しく話し合うことができました。また、少人数ではありますが留学生、教官、事務職員、技術職員とバラエティのある構成で行うことができ、いろいろな視点で理解することができたように思います。このような集いを今後も定期的に行い、大



呂福禄氏（右奥）

学の職員として身近な所から国際理解を深めていきたいと考えています。以下に交流会の内容を簡単に報告させていただきます。

1) 第1回交流会 参加者：留学生5人、教官1人、事務職員1人、技術職員4人

a. 講師：イワン・グンドロ氏（インドネシア）

インドネシアは13,679の島々からなっており、そこに300もの民族が住んでいる。人口は1億8,000万人であり、250の言語が存在する。標準語としてはインドネシア語が話されている。

b. 講師：呂福禄氏（中国）

中国で8年前に起きた「天安門事件」や「中国的教育制度」について詳しく説明された。

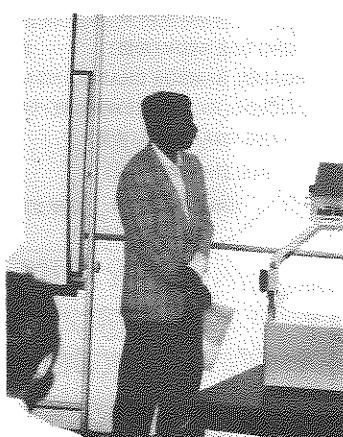
2) 第2回交流会 参加者：留学生5人、教官2人、事務職員1人、技術職員3人

a. 講師：ジュナイト・アミン氏（バングラディッシュ）

バングラディッシュは1971年、独立した新しい国である。面積は北海道と同じくらい、人口は日本と同じくらいである。宗教は殆どイスラム教であるがヒンズー教、仏教（仏教の発祥地に近い）、キ



イワン・グンドロ氏（正面奥）



ジュナイト・アミン氏



鄭泰勲氏

が起きれば大きな問題が生じてくる。

b. 講師：鄭泰勲氏（大韓民国）

韓国は日本に一番近い国（最短200km）である。大きさは北海道ぐらい。人口は4,000万人。中国と日本と韓国の文化はよく似ていると思う。気温は日本とだ

リスト教もある。気温は年間を通じて20°C～28°Cぐらいである。主食はご飯である。お茶がよくされる。世界一大きいベンガルトラがいる森を保全している。国のはほとんどがデルタ地帯のためサイクロンによる被害が大きい。さらに将来海面上昇

いたい同じであるが、ソウルの冬は岐阜の冬より3°Cほど低いと思う。6月には梅雨がある。11月にはキムチをたくさん（3ヶ月分）作り、それをキムジャンという。キムチは200種類あり、辛くないものもある。冬のボーナスをキムジャンボーナスという。宗教はAC1,400年より前は仏教がその後は儒教が支配的であり、文化・生活の基本となっている。

3) 花見交流会 参加者：留学生2人、技術職員3人

岐阜県墨俣町の墨俣城公園においてお酒とジュースおよびつまみを持っていき河川敷において行いました。城と桜を眺めながら様々な話を楽しくすることができました。

技術部では次回の交流会を本年3月に行う計画をしております。ご興味のある方はどなたでも内線2434の水上、内線2422の重松までご連絡下さい。

## 国際交流クラブ主催のテーブルディスカッション

教育学部1年 教育学科（治療） 番 れい子  
社会学科（地理） 魚谷 知子



番さん（左）と魚谷さん（右）

私達、国際交流クラブは12月17日Table discussion & Potluck Partyを開きました。昨年の「男女差別について考える」に続き、今年が2回目です。今年のテーマは「留学生のために何ができるか（How can we help overseas students of Gifu univ. live in Japan ?）」でした。昨年は大きな問題だったため、今年はもっと身近な問題でサークル活動に役立てていける話題となりました。

ディスカッションでは、1グループ留学生1人を含む5人で4つのグループ、計20人で行われました。資料をもとに、留学生の話を聞きながらグループごとに話し合い、その後グループの代表者に意見を発表してもらいました。

初めて留学生の住宅事情について話し合いました。NHKで放送された岐大留学生の住宅問題のビデオを

見て、資料を交えながら話し合いました。209人の留学生のうち、国際交流会館には36人しか入れず、他の学生はアパートを探さなければなりません。しかし、アパートは敷金、礼金を払わなければならなく金銭的に困難であり、また黒野寮のようにバス、トイレが共同の宿舎は宗教上の問題で入居できない人もいるそうです。しかし、この問題は私達学生の手では解決しがたい問題であり、国際交流の輪∞黒野のようなボランティアの方々の協力が必要となってきます。岐大周辺の大家さんに留学生の現状を知ってもらうことが大切だということでした。

次に大学生の国際交流に関する資料を読み、岐大における日本人学生と留学生の交流について話し合いました。まず、留学生の中に国際交流クラブを初めて知る人が多いのに驚きました。けれども日本人学生の中にも国際交流クラブの存在や活動を知る人が少ないのではないかと思いました。留学生には研究室で過ごす学生や院生が多いため、日本人学生と個人的に知り合う機会はほとんどありません。今回のディスカッションでも、留学生側からも、日本人学生側からも参加者が少なく、このような会を通じて、少しでも交流を持つもらいたいと思いました。また留学生の中にも日本語が得意でないために、このような会を敬遠する人も



いるそうです。そこで日本人学生が留学生の言葉を学び、留学生が日本語を学ぶということが提案されました。

留学生のサークルを作つてはどうかという提案もありましたが、同じ国でないと留学生同士あまり交流が

ないので難しいということでした。そのため国際交流クラブの中に留学生が入つてもらうのはどうかと提案されました。留学生側からも日本人学生と一緒にの方が良いということで、初めは留学生の部員が少なくても、少しづつ増えていけば良いのではないかということでした。

今後の課題として、留学生と日本人学生のかけ橋となれるように、新聞などを発行し、より多くの人に国際交流クラブの活動を知つてもらうようにしていこうと思いました。

この後ポットラックパーティが開かれ、歌やゲーム、ダンスなどが行われ、留学生と共に楽しいひとときを過ごしました。



### 「はじめまして」

国際交流室は新しい事務スタッフをむかえました。



昨年の9月から、国際交流室の事務補佐員の一員となりました。昨年3月に大学を卒業したばかりの新米ですが、少しづつ仕事に慣れて行きたいと思っております。とは言っても、まだ5ヶ月足らずなので、よく分かっていないこともありますし、これから生じてくる問題点も多々あるでしょう。しかし、それは時間がゆっくりと少しづつ解決してくれることと思います。

正直なところ、外国の方々と親密に付き合ったことは殆んどなく、まだまだ戸惑うこともあります。その反面、それがとても興味深かったりすることもあります。何と言いますか、未知との遭遇という表現が一番しっくりくると思います。未だ知らなかったことに出逢い、恐れながらもその状況を楽しんでいる自分を再発見することができます。それが自分自身の再発見も兼ねていたりして、驚くこともありますし、勿論深く反省することもたくさんあります。まだまだ力不足とは思いますが、ほんの少しでも自分の存在意義が見出せるといいな、と思っています。

学生部学生課国際交流事務室 藤田 美穂子

## 小さな“歩み”から大きな“一步”

学生部国際交流事務室長

森 章

今、国際交流が叫ばれる中、肩肘張っての交流では疲れます。もっと自然体で外国の方々とのふれあいを持ってみてはいかがでしょう。

今回のニュースレターにおいては今年度の新しい企画であるソウル産業大学と本学学生との「国際大学交流セミナー」及びルンド大学の研究者・大学院生と本学教官との「言語学及び言語に関する合同セミナー」についての記事が掲載されていますが、このほかにもいろいろな交流行事等がありましたので、御紹介いたします。

本学を訪問された方として、6月24日にフィリピン教員代表団一行6名が来学され、留学等に関する活発な質疑の後で、学内施設を見学されました。また、サマースクール開講中にルンド大学のホーカン音楽学部長が来学され、ルンド大学等のスクール生と一緒に琴の実習をされました。9月27日には本年6月に学術交流協定を締結したフィリピン・サントトマス大学の副学長他1名が来学、その後医学部創立50周年記念式典に出席されました。その際には、学術交流協定を締結している中国医科大学及び浙江医科大学の学長と共に特別講演会が行なわれました。続いて10月21日にオーストラリア・スウインバーン工科大学副学長が、また、11月21日にはロシアの教育情報省の担当官他3名が来学、学術交流協定、留学生の交換等について話し合われました。そして、11月30日にはソウル産業大学から李教授を迎え、工学部において特別講演会が催され学内外から150人の研究者・技術者・学生が集まり、盛大に進められました。

訪問者だけではなく、派遣についても今年度は数々実施され、6月にはソウル産業大学へ学長、学生部長、留学生係長が行かれ、今後の国際交流の在り方について協議がなされ、8月には学長、国際交流委員長、国際交流事務室長がブラジル・アメリカへ行き、カンピーナス大学との学術交流協定の改訂調印、本学学生の受け入れ等に関する日系人との懇談、帰国留学生との懇談及び現状把握等のアフターケア、また、ノーザンケンタッキー大学での国際交流の在り方について協議及び留学中の本学生との懇談等が行われました。また、10月には工学部の箕浦教授及び佐々木助教授がソウル

大学へ派遣され、箕浦教授は研究者交流及び学生交流の詳細にわたっての協議、佐々木助教授は特別講演会を実施しました。そして、本年に入って、1月にはサンフランシスコ、2月にはマニラ・台北において開催された日本の大学紹介である「1995年日本フェア」に、アメリカへは国際交流委員長、国際交流室長そしてフィリピン・台湾へは学生部長、学生課長が派遣され、岐阜大学を、そして岐阜を紹介すると共に、留学等に関する情報を提供して来られました。

このような新しい企画や事業が少しづつではありますが進められています。しかし、このような情報がこれまで滞っていることは至めない事実ですので、今後あらゆる情報を集め、把握した上で、伝えるべき情報を的確に、迅速に伝える努力をして行きたいと思っています。

この他に、二つの新しい交流活動が芽生えましたので御紹介します。

一つは、昨年10月に地元黒野の有志によるボランティア組織「国際交流の輪∞黒野」が発足し、留学生に対する物資的支援（電気製品、生活用品等の集積供与）、精神的支援（ショートホームステイ、柿狩り等の懇親会）労働的支援（引っ越しの手伝い、公共機関への案内）等が行われています。もうひとつは、学生の課外活動団体である国際交流クラブが12月17日（土）に留学生や国際交流担当者を囲み“今、留学生は何に困っていて、私達は何をすれば良いのか？”をテーマとしたテーブルトークを行ない、その中で挙げられた問題点を集約し、1月から早速行動に移り、留学生クラブ員の加入（既に4名が加入）、衣類品の供与、交流関係広報紙「International Hot News」の発行と、留学生との接点を求めて動き始めました。

このような状況の報告をさせていただき、留学生が200人を超えた今、そしてさらに活発になると予想される交流活動のなかで、留学生援助会への加入、ショートホームステイの申込、フリーマーケットへの商品供与、アルバイトの紹介及び生活用品の供与等皆さんの御協力と御理解をお願い致しますと共に楽な気持ちで外国人とのふれあいをしてみませんか。

何かありましたら、私どもに話しかけてください。

## ◎お知らせ

- 国際交流室では「岐阜大学夏期短期留学報告書」を作成しました。本年度のサマースクールの内容、参加者の感想や意見、今後の実施へむけての反省と展望などを掲載しました。報告書を御覧になりたい方がありましたら、国際交流室までお知らせ下さい。
- 学生部学生課留学係では、来年度も本学学術協定校である浙江大学（中国）、ノーザンケンタッキー大

学（アメリカ合衆国）、ルンド大学（スウェーデン）への夏期休暇中の短期留学生を募集する予定です。説明会は4月に行ないます。詳細は学生課にお問い合わせ下さい。

- 新年度から国際交流室は国際交流センター（仮称）と改め、旧工短ホールに移転します。談話室等もありますのでどうぞいらして下さい。

1995年度 日本語クラス時間割表（平成7年4月10日～平成7年9月18日）（予定）

	月	火	水	木	金
9:00					
10:30	1 初級I-1 加藤 初級II-1 河地	初級I-3 六郷 初級II-3 後藤	初級II-4 後藤 中級-1 及川	初級II-5 河地	初級I-7 中島 初級II-7 加藤 C I-2 後藤
10:40	2 初級I-2 河地 初級II-2 加藤	初級I-4 後藤 C I-1 中島 C II-1 六郷	初級I-5 及川	初級I-6 河地 初級II-6 中島	初級I-8 加藤 中級-2 後藤 C II-2 中島
12:10	昼休み				
13:00	3 D II-1 六郷			D II-2 及川	
14:30	4 D I-1 六郷			D I-2 中島	
14:40					
16:10					

前期授業：4月10日（月）～9月18日（月） ゴールデンウィーク休み：4月29日（土）～5月7日（日）

夏休み：7月15日（土）～8月31日（木） なお、日本語オリエンテーション（クラス説明会）を4月6日（木）に予定しています。詳細は国際交流室（新年度からは国際交流センター（仮称））にお問い合わせ下さい。

## ● 編集後記

ひとりひとりの在学期間は短くとも、留学生がこの地で育んだ学問的基礎と人間関係は、彼らにとっても私たちにとっても一生の財産となりうるものでしょう。帰国した留学生に教育、研究交流の機会を確保するため、国際交流室では昨年度より既卒者を含めた全留学生のデータベース作成を行なっており、一応の完成も間近となりました。

受け入れる留学生数の統計的な増加だけでなく、「来てよかった」と思って帰国する留学生と、彼らと出会えてよかったと思う日本人学生も確実に増えていって欲しい。留学生にとって岐阜大学が「母校」となるために、私たちは何ができるのでしょうか…。 （永井）

発行 岐阜大学国際交流室

広報係

〒501-11 岐阜市柳戸1-1

☎ (058) 293-2142

FAX 058-293-2143